(E)ISSN: 2181-1784
6 (21), 14.03.2026.
www.oriens.uz

『望郷と海』に書かれた石原吉郎のシベリア抑留

https://doi.org/10.24412/2181-1784-2026-21-12-25

アブドラヒモワ　ディヨラ
教員
タシケント国立東洋学大学日本語学部
diyora.9208@gmail.com

要約：本論文は、詩人・石原吉郎が帰還から 15 年後に発表したエッセイを通じ、極限状況における人間の本質を検討したものである 。石原は、過酷な収容所生活で生き残った事実を「人間としての堕落」と捉え、死者に対する深い自責の念を抱いている 。収容所では個人の死が統計的な集団の死へと変質しており、石原は「名のある個人」として死ねない恐怖を強調している 。生存の代償として、他者への不信感や近親憎悪が生まれ、人間同士の信頼関係が失われていく過程が詳細に描かれている 。自己防衛のための「無関心」や、現実を表現しきれなくなる「失語」状態が、生き残るために不可欠な要素となっていた 。著者は、本作が自身の体験を問い直し、シベリアで倒れた同胞を記録・追悼するために書かれたものだと結論づけている。

キーワード：抑留、人間性、「生」と「死」、生き残る、人間の価値

ABSTRACT

*This paper examines the essence of humanity in extreme conditions through an essay published by the poet **Yoshirō Ishihara**, fifteen years after his return from Siberia.Ishihara perceives the very fact of surviving the harsh life of the labor camps as a "degradation of humanity," carrying a profound sense of guilt toward those who perished. In the camps, the death of an individual was transformed into the statistical death of a collective. Ishihara emphasizes the terror of being unable to die as a "named individual.". The paper details the process by which mutual trust is lost, replaced by a deep-seated distrust of others and "near-group hatred" (narcissistic rage) as a price for survival. To endure, it became essential to adopt "apathy" as a means of self-defense and enter a state of "aphasia"—where the*

reality of the situation becomes impossible to express through language.The author concludes that this work was written as a way for Ishihara to re-examine his own experiences and to record and mourn his compatriots who fell in Siberia.

Keywords: *Internment, humanity, "life" and 'death", survive, human value*

序論

本論文では詩人として知られていた石原吉郎のエッセイ『望郷と海』に描かれているシベリア抑留について検討していく。石原吉郎は帰国直後からシベリア体験を詩によって語っていた。石原は、散文を書かないとしばしば述べたが、帰還して一五年後シベリア抑留体験のエッセイを数篇発表する。後にそれは『望郷と海』[1]という題で出版される。

一連のエッセーは、シベリアの強制収容所（ラーゲリ）における日本人抑留者、とりわけ石原自身の行いを論理的に分析し、その内面を掘り下げていく。描き出されるのは、生と死が紙一重の極限状況においてあらわになる人間の本質だ。暴力的で、権力的なその姿は、現在に通じる問いとなって足元をぐらぐらと揺さぶってくる。もしもこういう状況に置かれたら、お前はどう生きるのか——と。[2]

「一連のエッセイ」は『望郷と海』と一九七四年に発表された『海の流れる河』を指している。筆者は『望郷と海』を扱う上で畑谷の述べた「状況においてあらわになる人間の本質」という指摘がこの作品の重要な点であると考える。ここではそれに注目しつつ、収容所での日常を分析することによって石原が述べた自己の「体験を問い直す」ことはどのような状況のもとで、どのように行われたのかを詳細に検討していく。

まず、極限状況における宿命的な問題である「生」と「死」についての石原吉郎の受けとめ方を分析する。そのうえで、「生きのこる」ことがどのように実現できたか、そのために人間として失われたものについて検討する。

[1] 石原吉郎『望郷と海』筑摩書房、一九七二年一二月二五日

[2] 畑谷史代「「シベリア」と誠実に向き合った人」（特集　石原吉郎の１００年）、「現代詩手帖」二〇一五年一一月

「生」と「死」について

『望郷と海』の「Ｉ」には直接シベリア抑留をテーマにしたエッセイが収められている。それぞれのエッセイにおいて抑留の過酷な状況が描写されてはいるが、全体に通じる一つの話題を考えるとすれば、間違いなく「生」と「死」の関係及び生き残った側の〈自責の念〉や〈罪〉の意識がある。換言すれば、生き残った者としての石原吉郎の自己批判がそこにあると考えられる。その根拠は、石原が「『望郷と海』について」において「帰って来たものは、なんらかのかたちですでに、人間としてやぶれ果てた姿だという事実を忘れるべきではない。一人の英雄もそこからは帰ってこなかったのである」と述べていることによる。それに近い言葉は石原に大きな影響を与えたヴィクトール・フランクルの『夜と霧』[3]にみられる。

全く幾多の幸福な偶然、あるいは――そう呼びたいならば――神の奇蹟によって、生命を全うして帰ってきたわれわれすべては、そのことを知っており、次のように安んじて言いうるのである。すなわち最もよき人々は帰ってこなかった。

石原とフランクルには「帰ってきたもの」としての〈自責の念〉がよく表れているのではないだろうか。それを意識すれば、両作者の作品における死者への態度がよく理解できる。

では『望郷と海』における「私」の死んでいく人たちに対する態度について見てみよう。例えば、「確認されない死のなかで」のエピグラフで引用されているアイヒマンの「百人の死は悲劇だが／百万人の死は統計だ」という言葉は、作品内で書かれている抑留者の死の現状と、「私」がそれをどのように受け入れているのかを的確に表している。抑留が始まった年は最も多くの人がなくなった。それは飢餓、発疹チフス、未経験の状態に陥った結果である。しかし、その死者のなかには一人の個人としての人間の死がない。数としての死者があり、集団があって、無名の戦士たちがいるのみである。個を重んじる

[3] 四．ヴィクトール・フランクル『夜と霧』（ドイツ強制収容所の体験記録）霜山徳爾訳、みすず書房、一九五六年八月一五日

「私」にとってはそのことが何より苦しい。なぜなら、死者を一人の個人として、名前のある人間として記憶したいという気持ちが強いためだと推定できる。また、死者に対する尊重の念が込められていることも否定できないだろう。

石原の収容所では「個人」の死がない。「集団」になることはまず〈個人〉という概念を崩す。「集団」で行動をとるときにはひとりの人間としての〈個人〉の責任が問われないように、死ぬときもひとりひとりの人間としての価値が見落とされてしまう。石原にとっては大勢が一気に死ぬことではなく、名前のある一人の人間として死ねないことが「おそろしい」のである。それほど「個」というものにこだわりを持っていたことがここから窺える。同時に人間を統計化することへの不満も見られる。しかし、石原自身が「集団」の外にいたとは言い切れない。人間が一人では生き残ることができない状況であったために、〈共生〉が余儀なくされた生活を送ることもあり、語り口として「私たち」という人称が用いられ、そのなかに自分も含まれていることを明かしている。

「確認されない死のなかで」においてはジェノサイドと対立的で、しかし、石
に衝撃を与えた二つの死が書かれている。その一つ目が食事中にそっと死んでいた日本人の男性である。

ある朝、私の傍らで食事をしていた男が、ふいに食器を手放して居眠りをはじめた。そのときの囚人の手から食器をひきはなすことはできない。したがって、食事をはじめた男が、食器を手放して眠り出すということは、私には到底考えられないことであったので、驚いてゆさぶってみると彼はすでに死んでいた。そのときの手ごたえのなさは、すでに死に対する人間的な反応をうしなっているはずの私にとって、思いがけない衝撃であった。すでに中身が流れ去って、皮膚だけになった林檎をつかんだような触感は、その後ながく私の記憶にのこった。

「すでに死に対する人間的な反応をうしなっているはずの」石原に衝撃を与えたのは「皮膚だけになった林檎をつかんだような触感」である。「死」に対して人間的な反応を

失うことは、死者が最も多いか、それとも死と距離があるか、の二つの場合においてみられるのではないか。収容所の生活のなかでは死者が大量に出て、自分も生きることに必死なときに、死に対する反応が正に「人間的」ではなくなると考えられる。しかし、栄養失調になり、「自己の蛋白質」に「食いつぶ」されてしまった人間を、手の触感をもって感じることによってそれがよみがえったのではないだろうか。このような死はまれではなかったが、身近に手の感覚でそれを体験したことは石原にとって大きかっただろう。それのみではない。その場面についての考えを、以下のように書いている。

彼にも一個の姓名があり、その姓名において営なまれた過去があったということなど到底信じがたいような、不可解な物質であったが、それにもかかわらず、それは、他者とはついにまぎれがたい一個の死体として確認されなければならず、埋葬にさいしては明確にその姓名を呼ばれなければならなかったものである。

「確認されない死のなかで」は主に「生」と「死」について語られる。そのなかで、〈名前〉は個人としての人間の証でもあり、そのときまで生きてきた自分の〈歴史〉がそこにあることを石原は伝えようとしている。フランクルの、人間が「番号」化されていたという証言を、石原は一人の〈個人〉としての〈人間〉という形で、もっと踏み込んで解いている。

二つ目は森林伐採の現場で、切り倒された樹の下敷きになって亡くなったルーマニア人の死である。ここでは、石原がその死体を目にした場面が描かれている。私の目がその下半身をたどって、雪明りのなかで上半身にとどいたとき、思わず私は息をのんだ。上半身が仰向いていたからである。死体の胴がねじ切れていたことに気づくには、それほどの時間を必要としなかった。私はまっしぐらにバラックへ逃げかえった。その時の私のいつわりのない気持ちは、一刻でもはやく死体から遠ざかりたいということであった。「あれがほんとうの死体だ」という悲鳴のようなものが、バラックの戸口まで、私の背なかにぴったりついて来た。

これに関して石原が最初に考えたのは、「人間は決してあのように死んではならない」ということである。石原吉郎は様々な死に方を見てきたに違いない。しかし、そのなかでルーマニア人のような死に方は人間にとって最も悲劇的であろう。石原のみならず、誰からみても悲惨なものであり、誰しもそのような死に方を望まないに違いない。さらに、その死は一人の人間の死として認識されることはなかったと考えられる。そのために、石原は「人間は決してあのように死んではならない」と思うのである。この二つの死は記録すべき、常に忘れられることのない人間として残されねばならない、という意識が読み取れる。

一方で、強制収容所において死んだ人間に関して以下のような考えもみられる。いわば人間でなくなることへのためらいから、さいごまで自由になることのできなかった人たちから淘汰がはじまったのである。（**「強制された日常から」**）

このように述べることは、生き残った人間の非人間的な行為を暗示しているかのように読み取れる。言い換えれば、状況に適応することが生き残る秘訣となった。したがって、収容所における「生」について述べるとき、「適応する」ことに着目せねばならない。石原は「『望郷と海』について」では「適応とは「生きのこる」ことであり、さらにそれ以上に、人間として確実に堕落して行くことである」と述べている。言い換えれば、収容所で「生きのこる」ことは「人間として確実に堕落」することを意味するといえる。さらに、おなじエッセイのなかでは次のような記述がみられる。

私にとって重要なことは、私が適応したという事実、私が生きて帰って来たという事実の納得と承認である。生きて帰って来たという事実そのものが、のがれがたく堕落である地点まで一度は自分を追いつめなければならないのではないか。私に出発という行為があるとすれば、かろうじてそののちである。（**「『望郷と海』について」**）

この引用と本節の冒頭に引いた石原の「一人の英雄もそこからは帰ってこなかったのである」という言葉はつながっており、自己の生き残りの「生」は決してよろこばしいことではないという結論を引き出す。

では、なぜ「生き残った」ことは幸福なことだと言えないのだろうか。生き帰還した抑留者が当時のことを考え直した時に、死者への「自責の念」や「罪悪感」を感じたのはなぜなのか。その理由は、過酷な状況で生き残るために、抑留者は人間にとって大事なものを犠牲にしなければならなくなったからである。それについて二節で詳細に見てみよう。

生き残るための代償

強制収容所という、人間が生きるには適しない状況のなかで抑留者が生き残るには、何かを喪うという大きな代償が必要となった。その第一の代償が人間に対する信頼感であり、それは不信感へと変化していった。不信感が生じた原因の一つには抑留者が〈共生〉を余儀なくされたことがある。『望郷と海』において不信感が描かれているのは食事の場面である。食器が不足しているため、二人分が一つの食器に入れられることで、二人ずつ「食罐組」を組むことになる。その「食罐組」はどのように組まれるのかについては次のように書かれている。

> 食罐組をつくるばあい、多少とも親しい者と組むのが人情であるが、結局、親しい者と組んでも嫌なものと組んでも、おなじことだということが、やがてわかった。というのは、食糧の絶対的な不足のもとでは、食罐組の存在は、おそかれはやかれ相互間の不信を拡大させる結果にしかならなかったからである。（**「ある〈共生〉の経験から」**）

ここでは相手が親しい人であれ、嫌な人であれ、不信感を覚えるのには関係がないということが指摘されている。その理由は食糧が少ないことにある。その量の少ない食事をどのようにして平等に分配するかが問題になり、分配のやり方を何回も変えている場面も作中に描かれている。また、分配の際の、相手に対する疑いの姿勢が次の文章から窺える。

分配が行われているあいだ、相手は一言も発せず分配者の手許をにらみつけているので、はた目には、この二人が互いに憎みあっているとしか思えないほどである。（同前）

ここでは、相手に対する不信感がはっきり見られる。生物としての人間に生きるエネルギーを与えるのが食事だとしたら、栄養失調になっている抑留者にとってそれは正に命そのものとなるのではないか。そのために、自分の食事に真剣になるのは当然であり、分配している相手も同様である。したがって、一日における二食または三食の食事は、抑留者の神経を使うことによって獲得されると言える。

さらに、「強制された日常から」において語られているノルマによる食糧分配の問題もある。一人当たりの量が決められているなかから、ノルマを果たしたと見られる者とそうでない者とが分けられる。一人の抑留者の食糧が増食されることによって他の抑留者の食糧が減食される。収容所のこのような決まりも抑留者の間に不信感が増すきっかけを作る。

自分の命を直接危険にさらす者として相手を見ることがこの分配方法の問題である。しかし、この不信感のために〈共生〉をやめることはできない。「食罐組」同士の〈共生〉は労働の時も、睡眠の時にも自然に継続することになる。なぜなら、それは生き残るための手段だからである。

いま私に、骨ばった背を押しつけているこの男は、たぶん明日、私の生命のなにがしかをくいちぎろうとするだろう。だが、すくなくともいまは、暗黙の了解のなかで、お互いの生命をあたためあわなければならない。それが約束なのだから。そして同じ瞬間に、相手も、まさにおなじことを考えているにちがいないのである。（同前）

一人だけでは生き残ることができないがために他人の命が必要となる。自分の生命を危険にさらす者である相手に対して不信感を抱えながらもなお〈共生〉を続ける日常である。「ある〈共生〉の経験から」で書かれている不信感は食事の場面を中心にして

現れているが、密告のような場合も含めて自分に害を及ぼす可能性のある者として相手を見ていたために、常に不信感を維持していたと考えてよかろう。

密告は収容所で生きる人間の大問題であろう。そこに〈人間〉の本質が現れる。弱の正義」においては「針一本」で密告される経験をしたことについて書かれている。石原は密告を二つのタイプに分けている。一つ目は、「主として一般捕虜収容所で行われた」密告であり、〈つるしあげ〉、「民主運動と、これを巧妙に利用したソ連当局の、いわゆる〈かくし戦犯〉の摘発」に関連するものとしている。つまり、「民主運動」を装った密告であり、それを「〈密告〉ということはできない」と述べている。

二つ目は、石原が経験した密告であり、「まったくな孤独な行為であり、その動機はしばしば不可解である」としている。密告はその被害者から行われ、被害者が同時に加害者ともなる。密告された側も被害者意識を持つことになる。このような誰に密告をされるのかわからない、わかっているにしても何も言えない状態で人間不信が強くなっていくのは当然なことではないか。

不信感は自分の命が相手によって取られてしまうという恐怖から来ていたとも言える。さらに、そのような不信感がやがて第二の代償である人間への愛情を奪うこととなる。

この憎悪の対象として石原は抑留者同士を挙げ、さらにそのなかでも身近にいる人間だということを指摘している。

> 強制収容所内での人間的憎悪のほとんどは、抑留者をこのような非人間的な状態へ拘禁しつづける収容所管理者へ直接向けられることなく（それはある期間、完全に潜伏し、潜在化する）、おなじ抑留者、それも身近にいる者に対しあらわに向けられるのが特徴である。それは、いわば一種の近親憎悪であり、無限に進行してとどまることを知らない自己嫌悪の裏がえしであり、さらに当然向けられるべき相手への、潜

在化した憎悪の代償行為だといってよいであろう。（「ある〈共生〉の経験から」）

憎悪が収容所管理者に向けられなかったのはなぜだろうか。その理由として考えられることは、収容所管理者があらゆる「人間性」を奪うために過酷な環境を作ったことも事実だが、各自の「人間性」を捨てたのは抑留者自身であったことである。自己の生命を脅かすのは無論その収容所の管理者でもあることは否定できないが、それより先に周りにいる他の抑留者から直接的な脅威を感じていたに違いない。ゆえに、周囲の人間に憎悪を覚えるが、「人間性」を捨てたのが自分自身であることを理解し始めたときからは、石原が述べたようにその憎悪の対象には自分自身も含まれるようになる。それは自分が他人と同様の立場にあり、自分も他人の生命を脅かす存在であることを念頭に置いているためであろう。他人を嫌うということは裏返して自分自身を嫌うことにもなる。

相手に対する不信感、敵意、警戒心のかたまりが憎悪に拡張していったのではないか。さらに、「誰もが精神的に深く傷ついており、もっとも困難な状態でのお互いの行動ははっきりおぼえていた」という一文のなかにはこの作品では語られていない多くの苦悩が隠されていると考えられる。しかし、すべての裏には如何にして生き残るかという思考があったのは確かなのだ。

収容所で生き残るための第一の代償である信頼と、第二の代償の結果持たされた相手への憎悪がなくなった時点で、第三の代償としてあらゆるものへの関心が失われる。人間は無関心な状態に陥った時こそが最悪の事態なのではないか。

石原は「一九五六年から一九五八年までのノートから」においてヤセンスキイの『無関心なひとびとの共謀』を引用している。

敵を恐れるな——やつらは君を殺すのが関の山だ。

友を恐れるな——やつらは君を裏切るのが関の山だ。

無関心なひとびとを恐れよ——やつらは殺しも裏切りもしない。だが、やつらの 沈黙という承認があればこそ、この世には虐殺と裏切りが横行するのだ。

ノートにこのような言葉を引用していることから、石原が無関心を長い間意識していたことは明らかだろう。『望郷と海』のなかで取り上げられた無関心もこれに近いものである。端的にいうと、それは他人の生命に対する無関心なのだ。しかし、細かく見ていくと一つは、「孤独」である自分とは関係のない他人への無関心であり、それを支えるのは自己の〈エゴイズム〉である。この〈エゴイズム〉は本来誰しも持っているのだが、極限状態においてこそ強く表れるものである。もう一つは、今まで経験してきたことから学んだ教訓としての周囲の出来事に対する無関心であり、それの背景には〈諦め〉のようなものがあると言えよう。

まず、他人への無関心から確認していこう。無関心は収容所の〈経験者〉から〈未経験者〉に向かって注がれることがしばしば見られる。例えば毒虫のマシカへの対応を〈未経験者〉は自らの体験を経て学ぶ。ほかのどのようなことに関しても〈経験者〉は沈黙の中で傍観者になっている。それに対して〈未経験者〉は「予想もしない事態に逢着するごとに、自分ひとりの力でこれを判断し、理解し、対処することをまなばなければならな」かったのである。

〈 経験者〉が自ら体験したことを他人に教えることはない。一種の〈エゴイズム〉がここにはある。しかし、〈未経験者〉も直に〈経験者〉となり、その〈エゴイズム〉を身に付けていく。この〈エゴイズム〉は生き残るために現れたものであり、自分が苦痛を経験したからには、他人に何の苦痛もなしに生き残る機会を与えようとしない。それが「人間」としての本質ではないだろうか。

そのような無関心は「無益な関心からまがりなりにも自己を防衛しようとする、一種の本能のようなものであったかもしれない」と石原は述べている。確かにその通りだと言える。「オギーダ」に書かれている石原の「不用意」の体験における周囲の沈黙は彼の生

命への無関心から起きたものであり、自分の生命への恐れ、「自己を防衛しよう」とする意志に支えられている。

次に、今まで経験してきたことから学んだ教訓としての周囲の出来事に対する無関心はどうなのか。この無関心は周りの出来事に対して無力であることを認識したうえで行われる。誰かが射殺されようと、新たな警備兵が来ようと抑留者には関係がない。なぜなら、それはどうしようもないことだからであり、そこにあるのはある種の「諦め」ではないかと思われる。そのために周囲の出来事に対して常に「沈黙」を保つことが余儀なくされる。

〈エゴイズム〉から来た無関心も、状況に慣れることから来た無関心も、当時の抑留者が自然にたどりついた心境なのであり、生き残るための武器であった。しかし、どんな状態においても無関心に陥ることは人間としての価値を問われることにかかわる。無関心になるということは傍観者になることを意味し、一人だけの世界に閉じこもって周りを排除してしまうことである。

しかし、一人の世界に閉じこもった「孤独者」でありながら、常に「集団」の中にいる。そのような状態において、第四の代償となるのが「個」としての存在である。それは収容されたときからすでに抑留者の「集団」として扱われ、何においても「平均化」されたことが大きな原因である。「沈黙と失語」において、「便所でさえも完全に公開された場所である運命を逃れえない環境ではもはやプライバシーなぞ存在する余地はない。私たちはおたがいにとって、要するに「わかり切った」存在であり、いつその位置をとりかえても、混乱なぞ起こりようもなかったのである」と示されているように、環境の影響による原因が大きい。抑留者もその「集団」に溶け込み、することから考えることまでが同じものになってしまう。それは、この「集団」が生き残るための手段でもあったためである。周りの人間と同じであることは、他人の注目を惹くこともなく、格別に事件に巻き込まれる恐れを防ぐであろう。しかし、囚人同士「「わかり切った」存在」になったために、言葉の必要性は薄

まる。次第に、言葉が第五の代償となっていく。石原はそれを「失語」と述べている。状況を言葉で表すことに意味がない、まさに言葉自体が意味を持たなくなるのである。

> あるときかたわらの日本人が、思わず「あさましい」と口走るのを聞いたとき、あやうく私は、「あたりまえのことをいうなよ」とどなるところであった。あさましい状態を「あさましい」という言葉がもはや追いきれなくなるとき、言葉は私たちを「見放した」。（「沈黙と失語」）

自分たちが置かれた状態を言葉によって表現しきれない。現実と言葉が持つ意味の隔たりがここに見られる。したがって、囚人は「失語」状態に陥り、さらに、石原自身が長い間その状態にいたことを告白している。「失語」状態になったため、囚人は必要なときに言葉を発することができないという現状に向き合わなければならなかった。

以上のように、非人間的で過酷な状況において「生き残る」ことは、精神的に衰弱し続けることによって達成された。抑留者は「人間性」の要素をひとつひとつ代償とするような破滅を繰り返し乗り越えていく。その代償は決して忘れられることなく各自の心に痕跡を残しているだろう。少なくとも石原がそのように認識していたことは彼のエッセイやノートから読み取れる。シベリアで体験してきたことに対する苦痛は帰還後も消えることはなかった。その明確な証拠こそが抑留の十五年後に書かれた『望郷と海』である。

結論

『望郷と海』は小説ではなく、エッセイなのでその中で書かれたことは虚構のものというより、作者を悩ませた、考えさせた問題が中心となっていると考えられる。このエッセイが書かれた理由について検討すると、まず思い当たるのが自分の抑留体験ともう一度向き合い、言葉にすることによって他人にもその体験をわかってもらいたいという気持ちだったのではないかということである。「肉親への手紙」からも読み取れるように、シベリア抑留は他人からはよく理解されておらず、疑われることすらあった。

石原吉郎は、自己の体験と向き合うために書いたものであり、シベリアで眠っている同胞を記録するために書いたのである。さらに、生き残って帰った人間として死者への「自責」のために書いたのではないかと考えられる。

参考文献：

1. 石原吉郎『石原吉郎全集 Ⅲ』化新社、一九八〇年三月一日
2. 石原吉郎『望郷と海』筑摩書房、一九七二年一二月二五日
3. 奥泉光、山城むつみ、川上未映子「戦後文学を読む　第六回　石原吉郎」「群像」六六号、二〇一一年九月
4. ヴィクトール・フランクル『夜と霧』（ドイツ強制収容所の体験記録）霜山徳爾訳、みすず書房、一九五六年八月一五日
5. 畑谷史代「「シベリア」と誠実に向き合った人」（特集　石原吉郎の１００年）、「現代詩手帖」二〇一五年一一月
6. 畑谷史代『シベリア抑留とは何だったのか――詩人・石原吉郎のみちのり――』岩波書店、二〇〇九年三月一九日
7. 武田泰淳「文芸時評 O 下」、『東京新聞』夕刊、一九五二年九月二日